回り道を辿る楽しみ……

『阿賀に生きる』について

阿部　マーク　ノーネス

今年の春、私がアリゾナの自宅でどんなに驚いたか想像してほしい。『阿賀に生きる』のビデオテープが速達小包で届いた時の驚きを。正直なところ、小川紳介の葬儀のすぐあとに日本を離れた時には、日本ドキュメンタリーの近未来について、いくらか悲観的な気持ちを抱いていた。日本では大規模な組織ほど、方向性を備えた興味深い映画を制作するプロダクションのためには動かない。そして、商業主義という主流に抗って制作を続けるだけのエネルギーを持つアーティストは稀なのだ。無尽のエネルギーを発する小川さんを失って、日本映画界には大きな穴があいたように思えた。それもある部分ではいえるかもしれないが、小川さんの死による空白を佐藤さんが埋めたというつもりはない。そう言うことは佐藤さん自身の業績を過小に評価することになる。昨年の山形映画祭では、私はこの作品を観られなかった。しかし、暖かい春のアリゾナでの一夜、ビデオテープを回すとたちどころに、私はアメリカの乾いた砂漠から、豊かな阿賀野川の世界へと足を踏み込んだのだ……ジョン・フォードの世界から佐藤真の世界へと。

私は、スタッフが阿賀野川ですごした四年間の共同生活について書いてもいいし、これが彼らの最初の映画だという驚嘆の事実について述べてもいいのだが、それにもまして一つのショットのことを語りたい。

このショットは映画の中にうまく配されて、あとあとまで余韻を残した。私は、ふつう観客を魅了するどんな理由ともちがう理由で感動を受けた。このショットには、美しい風景も、カーチェイスも、爆発も、衝突もない。怜悧なテクニックや身震いするほど莫大な予算もこのショットは要しなかった。ただ一人の老人を映す。すばらしく永い時間にわたり、ただ指で耳を掻く一人の男を。彼は耳をこすり回し、所作の成果を眺め、何気なく床にはじき飛ばす。それだけだ。

このショットが大きなパズルの一部分になっているわけではない。というのも、私の映画学校時代の友人たちが求めてやまない物語的な「動機づけ」がこのショットには全くない。大方の映画作家たち、とりわけ西欧の監督たちには、意味もなく、不必要にしか感じられないだろう。だが、私にはこの映画の特に重要な瞬間のひとつだ。映画制作への一つの姿勢がそこに凝縮されている。そして、その姿勢によって『阿賀に生きる』は日本のベストドキュメンタリーの中に列せられるのだから。

この映画は顔と手……そして水俣病を映しだす。才能の乏しい作家がこの主題に取り組んだなら、まちがいなく、感情的な主張と、慎重な議論をバランスよく配しただろう。『阿賀に生きる』は、より遠回りなルートを辿る。水俣病の問題を先へ先へと送りながら、さりげなくコメントをはさみ、水俣病のためにねじれた手を静かに映す。

だが、私が印象深かったのはこれらのショットではない。私が心ひかれ続けたのは、腰かけたまま、一心に耳を掻いている「おじいちゃん」だ。この映画は、大部分が川沿い一帯で暮らす老人といってよい人たちの日常の生活スタイルとかかわっている。そのスタイルは彼らとともにやがては消えゆくだろう。先祖代々からの田圃での稲作から始まって、梁に柿をつるすシーンまで、佐藤さんたちは彼らの暮らしの断片を緻密に観せてくれる。中には、沈黙の時間もあり、日本（あるいは新潟）以外に住むものには理解しにくいシーンもある。この抑制の効いたアプローチがこの映画の力の源なのだ。

もともとは、佐藤監督はインタビューを用いていた。結果的にそれを投げ捨てた。この選択は、レンズの前に拡がる現実への不制御という大きな成果をもたらした。かわりに、阿賀野川に生きる人々に、映画の中で決定的な主体性を与えようという

意図がきわだってくる。カットを告げられることもなく、想像しうる議論を強いられたりしないばかりか、まるで彼らが制作者たちと一緒に映画を共作しているかのようですらある。言葉を変えれば、彼ら制作者たちは映画の対象を対象としては扱わない、ただそれだけなのだ。そして、この意味において、彼らは日本の大いなるドキュメンタリストたちに連なるのだ。観客は、この映画が常に人々の内省を描きだしていることに気づき、やがて自分自身をも、自己主張を和らげつつ、みつめなおすようになる。この過程が、私たちにも阿賀の人々のこころを共有しうるよう働きかけてくる。そしてその中から、彼らの悲劇が力強く浮かび上がってくるのだ。

訳・木村裕子

『阿賀に生きる』の佐藤監督の話

この映画の主人公とも言える、阿賀野川を地図帳で調べてみると、日本海から会津盆地の近くまで流れていて、川の長さは210キロメートルで、最上川より約30キロ短いが、かなりの河川なのです。

その阿賀野川を昔から、田畑の水源、川漁、舟運などの生活の糧として、暮らしてきた人々にとっては、無くてはならないものなのです。そして、彼らは昭和電工が廃棄していた水銀汚染の水によって、知らず知らずのうちに水俣病に冒されてしまい、国や新潟県から、それを認定してもらえない患者なのです。

しかし、映画の中で、キャメラはあえて水俣病そのものには触れずに、病に冒されながらも、昔ながらの知恵で黙々と生きている彼らの様子を撮り続け、それを見ている私たちは、彼らなりにたくましく生きる姿に感心してしまうのです。

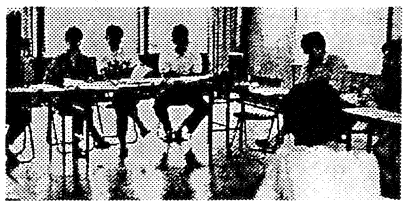
ところで、この『阿賀に生きる』を三年がかりで撮り終えた佐藤真監督の話は、なかなか興味深いものでした。まだこの映画を見ていない人

第四回ネットワーク総会のまとめ

六月六日、七日、東根市青年センターにおいて、ネットワーク総会が行われた。

六日は『阿賀に生きる』の上映会と、佐藤真、飯塚両監督を交えた交流会で、三十名近い参加者。正に朝まで語り明かすこととなった。

七日は中島洋さんのビデオ作品『ミョンジャ、明子、ソーニャ』の上映と、基本方針、活動方針などについて話し合われた。



「シネマフットワーク」の名称の廃止

ネットワークの事務局として、また独自の活動もしていくということで、「シネマフットワーク」を設立しました。が、対外的な知名度と、ネットワーク、シネマフットワークの違いへの理解がしにくい、名称が浸透していかないなどの理由で「シネマフットワーク」を廃止します。

□名称はこれまでの「シネマフットワーク」を「ネットワーク事務局」とする。「つうしん」も「ネットワークつうしん」とする。

□山形県内ネットワークの映画祭関係の事務局として活動する。

□ネットワークの運営体制を整備し、事務局員及び「つうしん」編集局員を確立する。

運営体制が次のように決まりました

1 活動、企画についての案の集約（事務局）
↓
2 例会議案の作成（事務局）
↓
3 例会にて案の検討、決定（例会参加者）
↓
4 企画の実行（メンバー全員）

※最終的な決定の場として例会を位置付ける。例会に参加できないメンバーで、意見等がある場合は電話等で事務局員まで伝える。また、例会後決定事項について問い合わせること。

事務局
代　表　高橋早也
事務局長　桝谷秀一
事務局員　木村裕子（兼会計）、鈴木英市